

逆接関係を表す表現に関する日中対照研究：文法化の観点からの分析を中心に

王, 琪

<https://doi.org/10.15017/2534516>

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

氏 名	王 琪			
論 文 名	逆接関係を表す表現に関する日中対照研究 — 文法化の観点からの分析を中心に —			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	松村瑞子
	副 査	九州大学	教授	山村ひろみ
	副 査	九州大学	教授	秋吉 收
	副 査	九州大学	准教授	内田 諭
	副 査	東京大学	教授	楊 凱榮

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、言語変化を説明する「文法化理論」を用いて、通時的および共時的という 2 つのアプローチから、日本語と中国語の逆接関係を表す表現の文法化現象について分析し、比較対照したものである。通時的な分析を通して、日中逆接表現がどのような歴史的变化を辿って接続表現まで文法化したのかを整理した。また、それらの逆接表現が、現代日本語と現代中国語ではさらに談話標識的な働きまで文法化した現象に注目し、共時的な分析によって、具体的な文法化プロセスを明らかにした。本論文の意義としては、従来通時的観点からの分析が中心的であった文法化の研究に、共時的観点からの詳細な分析を加えることで、日本語と中国語の逆接表現が談話標識的機能を持つまでの文法化プロセスを示したのみならず、それぞれの意味機能がどのようなやり方で共存しているのかを明らかにすることができた点にある。さらに、日本語と中国語の文法化のプロセスを対照させることで、それぞれの言語における文法化の類似点・相違点を明らかにしており、今後他の日中接続表現の文法化のプロセスについての考察にも示唆を与えることが期待される。

本論文は、全 9 章から構成され、その概要は以下の通りである。第 1 章では、研究背景、研究目的と研究対象について述べた。第 2 章では、先行研究を概観した上で、その問題点をまとめ、本研究の位置付けを行った。第 3 章で、文法化という理論について概説し、次いで第 4 章では、本研究で用いるデータおよび研究方法について説明した。

第 5 章から第 7 章が本論である。第 5 章では、通時的な観点から日中逆接表現がこれまで経てきたプロセスを詳細に記述した。現代の日本語と中国語に使われている逆接接続表現がどのような変化を経て、1 つの接続表現として成り立っていったのかを、先行研究の分析を踏まえた上で、文法化の理論に基づいて説明を行った。

第 6 章では、Traugott (1982) が提唱する文法化モデルに照らし合わせながら、現代日本語と中国語における各逆接表現の各段階での具体的な機能について考察していった。Traugott は文法化のプロセスを **Propositional Component > Textual Component > Expressive Component** という 3 つの段階に分けている。しかし、実際の会話例を分析したところ、この経路では説明しきれない会話例が観察されるため、元のプロセスに修正を加えた新たな経路を提示した。本研究が提示したプロセスは、**Content Textual Component > Interactive Textual Component > Procedural Textual Component** である。まず、発話者自身の前後の発話内容の逆接関係を表すもの、つまり“**Content Textual Component**”として使われる各逆接表現が用いられた会話例を示し、説明を行った。次に、

話し相手の発話した先行内容との逆接関係を表す表現は、“Interactive Textual Component”として分析した。最後に、逆接という本義が薄くなり、話し相手を配慮して和らげる機能を果たす談話標識として使われる“Procedural Textual Component”に該当する表現について観察した。上記の3つの段階の文法化のプロセスでは、逆接の本義が薄れていくことと、逆接表現の間主観性が次第に強まることが明らかになった。本章の最後では、各表現の出現数および談話標識としての使用数の割合を数値で示した結果、日本語の「けど」と「でも」、および中国語の“但是”と“不过”は出現数が高く、逆接を示す機能から談話標識の機能まで文法化が進んでいることが明らかになった。一方、「ただ」と“可是”は、出現頻度が低いだけでなく、談話標識的な使い方も観察できなかった。

第7章では、逆接表現として捉えられてはいないものの会話では逆接関係を示す機能を持っている表現として、日本語の「というか」および中国語の副詞“其实”を取り上げて議論した。「というか」と“其实”は、もともと逆接の接続詞ではないが、会話においては逆接関係を表すために使われることも多く、さらに、話題を展開させる談話標識にまで発達していることを、会話データを分析することで示した。

第8章は総合的な考察である。具体的には、出現頻度の高低、機能の多寡、出現位置と文法化の関係から、日本語と中国語の各逆接接続表現の文法化について、表現間および両言語間の類似点と相違点について考察した。その結果、逆接表現の文法化プロセスに伴い、「(間)主観化」が生じていることが明らかになった。さらに、第7章で取り上げた「というか」と“其实”が逆接の接続表現と同じプロセスで文法化する理由についても考察した。「というか」と“其实”は同じプロセスで談話標識まで発達したが、両者の逆接機能の背後に働くメカニズムは異なることが示された。

第9章では、論文全体をまとめ、本研究の意義および今後の展望について述べた。

本論文は、次の3点から学術的貢献をもたらしたと考えられる。まず、日本語と中国語の逆接接続表現が談話標識的な機能を持つまでの具体的な文法化プロセスを提案しており、その成果は他の日中接続表現の文法化の考察に示唆を与えることができる点である。次に、日本語と中国語の文法化現象を、通時的および共時的な両面から考察しており、複合的観点から重層的な分析考察を進めることができた点である。最後に、日本語および中国語の逆接表現が同様の文法化のプロセスを辿っていることを理解することは、第二言語として日本語または中国語を学習する際の一助になると期待される点である。以上により、本論文は博士(学術)の学位に値すると認められる。